

障害児者と健常者の「スポーツ統合」の可能性

綿 祐二（長崎国際大学 社会福祉学科）

1. 障害者スポーツの生涯スポーツの阻害要因は、10年前から変わらない

1992年、障害児者の生涯スポーツに関する調査の中で、生涯スポーツの実施継続の阻害要因として「アクセスの問題」「施設の問題」「専門指導者の養成問題」があげられた。10年後の2002年の同調査では「方法論・道具改良の情報不足」「アクセス問題」「指導者問題」「施設の問題」があげられた。10年前の調査結果とほとんど同じである。障害児者の競技スポーツは年々整備傾向にあるが、生涯スポーツへの支援の遅れが今後の課題である。

2. 障害児者の生涯スポーツとの出会いは、偶発的なものが多い

障害児者の生涯スポーツとの出会いは、「重要な他者」の存在から受ける影響が大きい。その重要な他者は、時として「友人」であったり、「高校時代の担任教諭」であったり、「障害者スポーツ指導員」であったりする。その重要な他者の懇親的な、個人的な(システム化されていない)サポートによって成り立っていることが多い。

3. 障害児者スポーツの教育的アプローチ ～教育から生涯スポーツへの発展過程～

教育的アプローチとして「障害を持つ学生に対する大学一般体育に関する基礎研究：授業形態と授業評価について」の中で現状として障害を持つ学生に対する授業を開設している大学のうち9割が健常学生と分離型の授業を行っており、さらに特に決まったカリキュラムもなく、一教員に一任され試行錯誤しながらの指導であることが指摘されている。また、学生による授業評価によると分離型よりも混合型授業の方が「生涯スポーツへの足がかり」への効果が高いことが示唆されている。さらに障害を持った学生への追跡調査を実施して「生涯スポーツ」への移行として最も影響を与えたのが「高校の授業からの引き続き」「地域におけるサポート体制」であった（1999～2000年度科研費奨励研究）。さらに障害者スポーツの継続要因としてパラリンピックや身体障害者国体などの競技スポーツへの参加が大きな影響を占めていた。しかしながら日常生活の中の生涯スポーツでの継続には多くの障壁があることも示唆された。その原因のひとつに「障害者自身のスポーツ参加に対する方法論的知識不足」と「健常者とのスポーツの統合」があげられた。

4. スポーツ統合の可能性 ～参加から参与へ～

